

受領者投稿

テーマ設定の自由度が高い企業研究所を増やしたい

オムロン サイニックス株式会社
シニアリサーチャー 橋本 敦史
(2017年度受領者)

私は幸運にも2017年度に貴財団の助成を受けることができました。この頃は研究資金に乏しく、助成が本当にありがたかったことを良く覚えています。また、この年は私にとって大学から企業の研究職に移るという決断をした節目の年でもありました。企業に研究の場を移してから大学との違いについて良く問われます。私の現所属は企業研究所であるためステークホルダーに対する貢献が求められます。一方で「本業に関係なく、自由に研究テーマを設定しても良い」という自由度もあります。このことを説明すると必ず「なぜ出資を受けられるのか？」とさらに質問を受けます。

会社が長期的な戦略を立てるためには未来予測が必要です。多くの大企業では会社設立当初には創業者が未来を予測していました。企業研究所の役割の一つに、未来予測があると理解しています。会社の長期的戦略、例えば20年後の近未来社会を予測すると考えれば大学における研究と視野の長さが近くなります。「未来予測を的中させるいちばん簡単な方法は、その未来を自ら作ることであり」といわれます。研究者がテーマを決め、それに取り組む。この営みは、まさに未来予測を的中させる手段と一致します。

企業研究所がテーマを決めるとなると、ステークホルダーは研究内容を思っている方向へ誘導できるか不安になることでしょう。誘導方法の一つは研究者へのインプットです。ステークホルダーが目指す「よりよい社会」を的確に伝えることができれば、大抵の研究者は生けるソルバーですので自然と解法を考え始めます。もう一つの誘導方法はチームデザイン（人事）です。未解決課題の多くは分野横断的なもので

す。そのような問題を解くためには専門性の異なる研究者のチームが必要になります。研究者は「このチームでできる一番凄いこと」を考え始めます。「インプット」と「チームデザイン」の組み合わせにより「事業から離れすぎず」かつ「自由な発想による研究」という絶妙な条件を達成することができると感じています。

振り返ってみれば2017年で採択されたテーマは私自身の未熟さゆえにやや重箱の隅をつつくような課題だったように感じます。それにも関わらず、若い研究者へ支援をしていただいたことに厚く御礼申し上げます。私は2019年度より言語指示に基づいて料理を作るロボットを研究しています。この分野もビックテックが後から多く参入して来ていますが、一歩先じてこの問題に取り組めたのは只々、現所属におけるインプットとロボティクスやHCIの研究者と共にある今のチーム環境のおかげです。

さて、本稿では企業と大学での研究の違いについて述べました。しかし、そこに本当に違いはあるのでしょうか？大学にもステークホルダーはいるはずで、ステークホルダーのために所属研究者へのインプットや分野横断的なチームデザインを戦略的に行う仕掛けが増えても良さそうです。今後、大学・企業を問わず、様々な研究者チームが出現し、大学と企業がもっと混ざり合う未来を夢見て、皆様にこの記事をインプットさせていただきます。

